銭稲孫訳『源氏物語』の特徴について（下）

田　中　幹　子
鄭　　寅　　瓏

はじめに

本稿は前号の続編であり、前号同様、銭訳『源氏物語』の魅力の分析とともに入手困難である銭訳『源氏物語』の翻訳の紹介と、銭訳の源氏物語のみならず平安文化への造詣の深さを分析したものである。前号と同じく原文の区切りは銭訳に従い、銭訳の六章以降を収録、翻訳、分析した(注1)。前号同様、鄭寅瓏氏によって銭訳を日本語に翻訳した。但し今回も呼称の訳は中国語のままに訳している。ただ、読みの不便を考慮し中国語の呼称の隣に括弧を付けて、日本語の呼称も入れた。また、銭氏は時折、主語などを省略するため、省略した部分も括弧の中に補った。

形式は、前号に従っている。

（六段）

原文

命婦は、まだ大殿籠らせたまはざりけると、あわれに見たてまつる。御前の壺前栽のいとおもしろき盛りなるを御覧ずるやうにて、忍びやかに、心にくきかぎりの女房四五人さぶらはせたまひて、御物語せさせたまふなりけり。

このごろ、明け暮れ御覧ずる長恨歌の御絵、亭子院の描かせたまひて、伊勢、貫之に詠ませたまへる、大和言の葉をも、唐土の詩をも、ただその筋をぞ枕言にせさせたまふ。

いとこまやかにありさま問はせたまふ。あはれなりつること忍びやかに奏す。御返り御覧ずれば、

いともかしこきは、置き所もはべらず。かかる仰せ言につけても、かきくら

す乱り心地になん。

あらき風ふせぎしかげの枯れしより小萩がうへぞ静心なき

などやうに乱りがはしきを、心をさめざりけるほどと御覧じゆるすべし。

いとかうしも見えじと思ししづむれど、さらにえ忍びあへさせたまはず。御覧じはじめし年月のことさへかき集めよろづに思しつづけられて、時の間もおぼつかなかりしを、かくても月日は経にけりとあさましう思しめさる。

「故大納言の遺言あやまだず、宮仕の本意深くものしたりしよろこびは、かひあるさまにとこそ思ひわたりつれ、言うかひなしや」とうちのたまはせて、いとあはれに思しやる。「かくても、おのづから、若宮など生ひ出でたまはば、さるべきついでもありなむ。寿くとこそ思ひ念ぜめ」などのたまはす。

かの贈物御覧ぜさす。亡き人の住み処尋ね出でたりけんしるしの釵ならましかばと思ほすもいとかひなし。

たづねゆくまぼろしもがなつてにても魂のありかをそこと知るべく

絵に描ける楊貴妃の容貌は、いみじき絵師といへども、筆限りありければいとにほひすくなし。太液芙蓉、未央柳も、げにかよひたりし容貌を、唐めいたるよそひはうるはしうこそありけめ、なつかしうらうたげなりしを思し出づるに、花鳥の色にも音にもよそふべき方ぞなき。朝夕の言ぐさに、翼をならべ、枝をかはさむと契らせたまひしに、かなはざりける命のほどぞ尽きせずうらめしき。

風の音、虫の音につけて、もののみ悲しう思さるるに、弘徽殿には、久しく上の御局にも参上りたまはず、月のおもしろきに、夜更くるまで遊びをぞしたまふなる。いとすさまじうものしと聞こしめす。このごろの御気色を見たてまつる上人、女房などは、かたはらいたしと聞きけり。いとおし立ちかどかどしきところものしたまふ御方にて、事にもあらず思し消ちてもてなしたまふなるべし。

月も入りぬ。

雲のうへも涙にくるる秋の月いかですむらん浅茅生の宿

思しめしやりつつ、灯火を挑げ尽くして起きおはします。右近の司の宿直奏の声聞こゆるは、丑になりぬるなるべし。人目を思して夜の御殿に入らせたまひても、まどろませたまふことかたし。朝に起きさせたまふとても、明くるも知らでと思し出づるにも、なほ朝政は怠らせたまひぬべかめり。ものなどもきこしめさず、朝餉のけしきばかりふれさせたまひて、大床子の御膳などは、い

とはるかに思しめしたれば、陪膳にさぶらふかぎりは、心苦しき御気色を見たてまつり嘆く。すべて、近うさぶらふかぎりは、男女、「いとわりなきわざかな」と言ひあはせつつ嘆く。「さるべき契こそはおはしましけめ。そこらの人の譏り、恨みをも憚らせたまはず、この御事にふれたることをは、道理をも失わせたまひ、今、はた、かく世の中のことをも思ほし棄てたるやうになりゆくは、いとたいだいしきわざなり」と他の朝廷の例までひき出で、ささめき嘆きけり。

銭稲孫訳

命妇仰见皇上，可怜还没进大殿，对了御前正当盛开的花坛，带着极上品的宫娥四五人，静悄悄在讲故事。这几时，朝暮看的，就是亭子院（1）敕画，伊势(2)、贯之（3）题咏的长恨歌画图，和歌、唐诗，诵不离口的，只是这一路。皇上细细垂问那边景况。命妇将凄凉情景悄声奏上。皇上开看回书：

“忝恩不知所措。每拜温喻，不胜目昧心迷。

自从叶落当风树

心在荻边未或闲”。

这般潦草，皇上也原谅她的伤心。自家还怕人看出来，竭力按捺悲思，却再也按捺不住，想起了定情之日以来的万种悲欢，深叹岁月之已逝。说道：“她那不背大纳言遗嘱，打成了进纳本意之功，一向惦着如何使她喜欢喜欢的。如今说也无用了！”十分怜恤于她。又道：“这呢，小皇子长成起来，也自然会有其机会的。但愿她寿长一些。”看过了送进的旧物。心想倘能是寻得了魂魄所在之征的钿合金钗么，咳，说也无用呵！

安得鸿都穷碧落，

为传魂魄在何方！

画里面的杨贵妃容貌，虽则是大名家的手笔，笔墨究属有限，还是没有情趣。把个形容得太液芙蓉未央柳的眉眼，妆扮的唐家风样，果然是十分端丽，可是想起她那分儿可爱神情，又不是花色鸟声所能比方的。朝朝暮暮，比翼连枝的盟誓相坚，却落的个红颜薄命，此恨如何有尽？一点风声，一句鸟啭，无不触动悲思，偏那弘徽殿，好久也不上殿上房（4）来，大好月光里，别自调弦弄管，热闹到夜深。殿上近侍以至宫娥，仰窥日来皇上颜色的，都觉可慨。举动多带棱角的那人，却不把来当回事。月亮落了。

“月暗云天秋叶露，

茅檐何似宿清辉？”

挑尽了孤灯未入眠的皇上，又惦念到了太夫人那边。右近官员奏直宿（5）的声音，当是丑时了。这才怕招人耳目，进入夕殿（6），却难合眼。及至朝起，又想起“眠来不晓”之恨（7），仍还无意早朝。膳食也不进。便膳只做个样子，正膳全然说不上了，以致陪膳人员窥见皇上的愁容，无不担忧。凡有男女近侍，都面面相觑，叹道不是道理。“真是前世有缘呵！也不管到处人怨，但及此事，便没了是非，如今又这般地厌世，下去着着实堪忧！”比引到别朝故事，切切私语。

1．宇多天皇（888-897 在位）禅位后称亭子院法皇，亭子院离宫名，法皇是入了佛道的上皇。
2．伊势御（877-939），服侍宇多中宫温子的侍从女官，第一流女歌人，三十六歌仙之一，有“伊势集”。
3．纪贯之（859-945），歌界第一名家，奉敕撰古今和歌集，亦三十六歌仙之一。
4．殿上的房间，在清凉殿内。
5．右近是右近卫府的略称。宫中巡夜，从亥时一刻开始，就是晚十点开始，由左近府值班。丑时一刻，就是夜里两点，由右近卫府接班。交班接班，唱名叩弦，叫做“宿直奏”。
6．清凉殿西头是皇帝夜寝之所，现在用长恨歌语译夕殿。
7．伊势御的作歌：眠来不晓珠帘卷，岂料曾无梦里逢。

銭訳の日本語訳

命婦は皇上を拝見し、まだ大殿に入っていないことをいたわしく思う。御前の真っ盛りの花壇を前に、極上品な宮娥四五人をそばにして、ひそかに話をしている。このごろ、明けても暮れても見ているのは、亭子院の勅絵（1）で、伊勢（2）、貫之（3）が読んだ歌が書かれた長恨歌の絵である。和歌でも唐詩でも、専ら読んでいるのはこうした筋のものである。皇上は細かくそちらの状況を尋ねる。命婦は物寂しい光景をひそかに奏上する。皇上は返書を見ると、

「御恩寵戴いてもどうしたらよいかわかりません。あたたかい御言葉を拝見するにつけても、心も真っ暗に思い乱れてたまりません。

葉っぱが風を防いでいた木から落ちて以来（更衣が亡くなって以来）、心は萩（光）のそばにあるが、すこしも静かにならない。

このようにとりみだしていて、皇上も彼女の悲しい気持ちを許した。自家（帝）は人に見られないようと心がけて、力を尽くして悲しい思いを静めようが、な

かなか静めきれず、情を定めた日以来のさまざまな悲しみと喜びを思い出し、月日が過ぎたことを深く嘆く。「大納言の遺言を背かず、入内の本意を果たした功績があるので、いつもどうにか喜ばせようと心にかけてきたが。今さらどうにもならないんだ。」と、彼女を実に不憫だと思う。「でも、小皇子が成長してくると、おのずからまた機会があるよ。長生きすることを望んでいるよ。」と伝えた。贈ってきた昔の物を見て、もし（長恨歌のような）魂の象徴である鈿合金釵をさがしあてたのならと、ああ、考えても無駄なことだ。

どうしたら碧落を窮める鴻都を手に入れられるだろう。

魂がどこにいるかを教えてくれるために。

絵に描いてある楊貴妃の容貌は、大名人の筆になるが、筆力にはやはりかぎりがあり、情趣がない。太液芙蓉未央柳の眉毛と目を、唐風の模様に装い、やはりとても端麗であるが、彼女の可愛げのある様子と表情を思い出すと、花の色にも鳥の声にもたとえようがないのである。明けても暮れても、互いに比翼連理の誓いをし、結局、美人薄命になってしまった悔しみは、限りがあるものか。風の音や鳥の音につけても、すべて悲しい思いにかられている中、あの弘徽殿だけは、長い間殿上（4）に上がらず、美しい月光の下、各自管弦の遊びをし、深夜まで賑やかにすごした。殿上の近侍から宮娥まで、このごろの皇上の様子を拝見してきた者は、皆嘆かわしいことだと思った。しかし、そのような振る舞いにつけても角があるお方（弘徽殿）は、大したこととは思わない。月が落ちた。

月は暗く、天には雲があり、秋の葉には露がある。

浅茅の宿でどうやって清らかな（月光）光が住むことができるのだろうか。

灯火を挑げ尽くしても起きている皇上は、また太夫人（桐壺更衣）に思いをよせる。右近の官員が宿直（5）を奏上する声が聞こえ、丑の刻のはずだ。ようやく人目をはばかれ、夕殿（6）に入るが、なかなか眠れない。朝起きたら、また「あくるもしらで寝し」（7）の悔しみを思い出し、まだ朝の政務をする気にならない。食膳もせず、簡略の食事も食べるふりして、正式の食事はいうまでもないので、食膳を奉仕する人々は皇上の憂い様子を拝見し、皆心配している。男女の近従のすべては、どうしたらよいかわからず、「前世にはきっと縁があるんですね！あちこち人の恨みを招くのもはばからず、このことになると、よしあしもなく、今になってもこんなに悲しみ続き世を厭うようになり、このままだとまことに心配だ！」と嘆き、他の朝廷のことも引き出し、ひそかに囁く。

1. 宇多天皇（888-897在位）譲位後亭子院法皇と称し、亭子院は離宮の名で、法皇は仏道に入った上皇である。
2. 伊勢御（877-939）、宇多中宮温子に仕える侍従女官、第一流の女歌人、三十六歌仙の一人であり、「伊勢集」がある。
3. 紀貫之（859-945）、歌壇の一番目の名家であり、勅を奉じて古今和歌集を編纂し、三十六歌仙の一人でもある。
4. 殿上の部屋、清涼殿の中にある。
5. 右近は右近衛府の略称である。宮中の夜間の巡察は、亥の一刻から始まり、つまり夜の十時から、左近府より担当する。丑の一刻から、つまり夜の二時に右近衛府により担当する。交替して、名をのり弦を弾くことは、「宿直奏」というのである。
6. 清涼殿の西の方は帝の夜の寝所であり、今は長恨歌の語で夕殿と訳し出す。
7. 伊勢御が作った歌：寝て玉すだれあくるも知らない、夢の中にあったかどうかわからない。

銭訳の特徴

帝が更衣の母を慰める部分「おのづから、若宮など生ひ出でたまはば、さるべきついでもありなむ。寿くとこそ思ひ念ぜめ」を「小皇子が成長してくると、おのずからまた機会があるよ。長生きすることを望んでいるよ。」と訳している。この直前、「『大納言の遺言を背かず、入内の本意を果たした功績があるので、いつもどうにか喜ばせようと心にかけてきたが。今さらどうにもならないんだ。』と、彼女を実に不憫だと思う。」と更衣の母の恩に報いようという気持ちからでている。後見のない立場で入内させたことが当時としては非常に無理をさせたという帝の思いが「功績」という表現に込められている。その続きの「また機会がある。（だから）長生きせよ」と言えば、更衣の母が「もしかしたら皇太子に」という夢を持ってしまうのではないかと読者に思わせる。それが当時としてあり得ない夢でも帝から言われればすがってしまうのもやむ負えないと思わせる訳である。物語の中でも、この後、様々な占いの結果、帝が光の立太子を諦める話となっていくので、この時点では桐壺帝は光の皇位継承に望みをもっていた。したがってこの時点では、更衣の母にそのような夢を抱かせる発言をしてもかまわないことになる。以上をすべてを理解した上での銭訳なのである。その部分、豊訳「但愿她健康长寿（彼女の健康と長寿を願うものである）」、林

訳「但愿她老人家能长寿就好了（お婆さんが長生きしてほしい）」では単に「長生きするように」と老人をいたわる言葉として訳し皇位継承に関連させるような訳になっていない。

（七段）

原文

月日経て若宮参りたまひぬ。いとどこの世のものならずきよらにおよすけたまへれば、いとゆゆしう思したり。

明くる年の春、坊定まりたまふにも、いとひき越さまほしう思せど、御後見すべき人もなく、また、世のうけひくまじきことなりければ、なかなかあやふく思し憚りて、色にも出ださせたまはずなりぬるを、「さばかり思したれど限りこそありけれ」と世人も聞こえ、女御も御心落ちゐたまひぬ。

かの御祖母北の方、慰む方なく思ししづみて、おはすらむところにだに尋ね行かむと願ひたまひししるしにや、つひに亡せたまひぬれば、また、これを悲しび思すこと限りなし。皇子六つになりたまふ年なれば、このたびは思し知りて恋ひ泣きたまふ。年ごろ馴れむつびきこえたまひつるを、見たてまつりおく悲しびをなむ、かへすがへすのたまひける。

今は内裏にのみさぶらひたまふ。七つになりたまへば読書始などせさせたまひて、世に知らず聡うかしこくおはすれば、あまり恐ろしきまで御覧す。「今は、誰も誰もえ憎みたまはじ。母君なくてだにらうたうしたまへ」とて、弘徽殿などにも渡らせたまふ御供には、やがて御簾の内に入れたてまつりたまふ。いみじき武士、仇敵なりとも、見てはうち笑まれぬべきさまのしたまへれば、えさし放ちたまはず。女御子たち二ところ、この御腹におはしませど、なずらひたまふべきだにぞなかりける。御方々も隠れたまはず、今よりなまめかしう聡づかしげにおはすれば、いとをかしううちとけぬ遊びぐさに誰も誰も思ひきこえたまへり。

わざとの御学問はさるものにて、琴笛の音にも雲居をひびかし、すべて言ひつづけば、ことごとしううたてぞなりぬべき人の御さまなりける。

銭稲孫訳

过了多时，小皇子进来了。越发长成得不像这世里人的清逸，皇上看了都觉肃

然可器。明年春上，册立东宫，不无改易之想，只怕的没个泰山可靠，事情也未必服得人心，反倒可危，也就没有形之于色，因之世人都赞叹：那么宠爱所偏，究竟圣明有自，女御也放下了担心。那外祖母老太太呢，寂寞得沉思默祷，但愿追踪金阙，看来感应在天，终于仙逝了，这又是一番无限悲伤。皇子年已六岁，今番懂事，追慕哭泣。那时老太太也反复道来：年来伴熟的，苦的撇舍不得。从此只在内里了。到七岁，开始读书（1），世间没有的聪明，皇上看得都觉得太可畏了。吩咐："如今谁谁都莫疏远了他。没了母亲，多怜爱些吧！"有时去到弘徽殿，都还带进帘内。这容貌的美秀，哪怕猛士仇家，见了也自然要温和含情的，女御也不欲见外于他。所生有二位皇女，还都比美不上。各宫院皆不须避嫌，都不觉萌些爱慕艳羞，大家都要逗他游戏亲近。正经学问且不说，弹琴吹笛，都能响遏云霄，数说起来，真个叫人难信的奇才。

1."读书始"的典礼，师傅侍读就座，读的大都是"御注孝经序"五个字。

銭訳の日本語訳

月日が経て、小皇子は参内してきた。ますます清らかでこの世の人だと思えないように成長し、皇上から見ても立派な器量だと思う。明くる年の春の初旬に、東宮を立てる時にも、（光に）変更したい気持ちは少なくないが、頼もしい支えがないと、人々に納得されられずかえって危ういと心配し、色にも出さなかったので世の人々も「あれほど寵愛していたが、（皇太子にはさせなかった）やはり聖明でいらっしゃるなあ」と賛嘆し、（弘徽殿）女御も心が落ちついた。あの外祖母のお婆様（更衣の母）は、寂しくて落ち込み、黙って祷り、金闕になり尋ねてゆきたいと願ったため、天に感応され、ついに世をさった。これもまた限りなく悲しいことだ。皇子は既に六才で、今度は物事が分かり（祖母を）恋い慕って泣く。お婆様も生前「（光が自分に）何年もなつき、（自分が死んだらと思うと）苦しくて手放せない」と繰り返し繰り返し訴えていた。（光は）それから専ら内裏にいる。七才になり、読書始めを行うと（1）、世にない聡明さで、皇上もあまりにおそろしいと思うようになる。「（更衣がなくなった）今となっては、誰も皇子を疎遠にしないでおくれ。母親がなくなったのだから、もっと可愛がってあげてね」と言った。時には弘徽殿に行っても、御簾の中に連れて入る。（光）の顔だちが美しいので、たとえ武士や敵であっても、（光を）見るとやさしくせずにいられない。（弘徽殿）女御も遠ざけようと思わない。（刳

徽殿女御が）生んだ皇女の二人も、この美しさに及ばない。各妃の方々も、思わず（美しい光に対し）温かい気持ちが生まれ恥じらいが芽生え、誰もが彼と音楽を奏でたい、親しくなりたいと思う。正式の学問はもちろん、琴笛を奏でると雲まで響かす（ようなすばらしさで）、（才能を）数えて見ると、まことに信じがたい優れた才能の持ち主である。

1.「読書始」の儀礼、師匠侍読は座に着す、読んでいるのはほとんど「御注孝経序」の五文字。

銭訳の特徴

1・年明けて立太子の決定の場面、帝は光を立てたかったが、後見もなく世間の支持も得られない状態で無理にならせても、将来が危ういとやむ負えずあきらめるが、その迷いを気取られないようにする。世間はその決定に際し「さばかり思したれど限りこそありけれ」と評する場面。銭訳では原文を「世の人々も「あれほど寵愛してえこひいきしていたが、やはり聖明に決まっている」とアレンジしている。原文では寵愛に「限りがある」という評価をくだした部分、銭訳では「究竟圣明有自（聖明に決まっている）」と讃えたとする。この表現は鄭氏によると帝を讃える時の一種の定型句であり、さほど大きな意味を読み取ることはできないが、「限り」と見る原文よりも「その決定が正しいのだ」と当時の常識を踏まえた表現をとっていることが銭氏の平安時代の皇位継承の背景についての理解の深さを示している。因みにこの部分豊訳では「于是世人都说：“如此钟爱的小皇子，终于不立为太子，世事毕竟是有分寸的啊！”（それで世間の人々は「こんなに可愛がられている小皇子でも、結局太子になれなかったことは世の事がやはり加減があるということだ」と言う。）」、林訳では「可是，这么一来，别人倒又议论纷纷起来，说什么疼爱也没有用啦，事情终究有际限啦云云。（しかし、そうすると、皆はまたいろいろ議論し、可愛がられてもむだだとか、物事がやはり加減があるとか言っている。）」となっている。

2・更衣の母が亡くなってしまうのだが、その原因について銭訳では言葉に表現されていないが、評価する世間とほっとする弘徽殿と対照的に並べる文脈から、更衣の母の死が帝が光の皇位継承が叶わないことが明らかになったことと関係していると解釈できる訳となっている。これに対し豊訳は「小皇子的外祖母自从女儿死后，一直悲伤，无以自慰（小皇子の外祖母は娘が亡くなった後、

ずっと悲しくて、慰められるのもできない)」と、娘の死を原因に訳し、林訳は「至于那位老祖母呢？死别了爱女，又生离了孙儿，心痛失望之余，日日祈祷着熬追随网女于黄泉之下，终于也去世。(あの年取ったお婆さんはどうなっているだろう。愛する娘と死別して、また孫とも離れ、心が痛くて失望するあまりに、毎日亡くなった娘のあとを追いかけて黄泉の下へ行こうと願い、ついに亡くなった。)」と更衣母の死を娘の死と結び付け、皇位継承問題と関わらせていない。

（八段）

原文

そのころ、高麗人の参れる中に、かしこき相人ありけるを聞こしめして、宮の内に召さむことは宇多帝の御誡あれば、いみじう忍びてこの皇子を鴻臚館に遣はしたり。御後見だちて仕うまつる右大弁の子のやうに思はせて率てたてまつるに、相人おどろきて、あまたたび傾きあやしぶ。「国の親となりて、帝王の上なき位にのぼるべき相おはします人の、そなたにて見れば、乱れ憂ふることやあらむ。朝廷のかためとなりて、天の下を補くる方にて見れば、またその相違ふべし」と言ふ。

弁も、いと才かしこき博士にて、言ひかはしたることどもなむいと興ありける。文など作りかはして、今日明日帰り去りなむとするに、かくありがたき人に対面したるよろこび、こへりては悲しかるべき心ばへをおもしろく作りたるに、皇子もいとあはれなる句を作りたまへるを、限りなうめでたてまつりて、いみじき贈物どもを捧げたてまつる。朝廷よりも多くの物賜はす。おのづから事ひろごりて、漏らさせたまはねど、春宮の祖父大臣などいかなることにかと思し疑ひてなんありける。

帝、かしこき御心に、倭相を仰せて思しよりにける筋なれば、今までこの君を親王にもなさせたまはざりけるを、相人はまことにかしこかりけりと思して、無品親王の外戚の寄せなきにては漂はさじ、わが御世もいと定めなきを、ただ人にて朝廷の御後見をするなむ行く先も頼もしげなめることと思し定めて、いよいよ道々の才を習はせたまふ。際ことにかしこくて、ただ人にはいとあたらしけれど、親王となりたまひなば世の疑ひ負ひたまひぬべくものしたまへば、宿曜のかしこき道の人に勘へさせたまふにも同じさまに申せば、源氏になしたてまつるべく思しおきてたり。

錢稲孫訳

那时，皇上听得来聘的高丽人中，有个善能相面的，只碍着宇多帝的遗诫（1），不好召进宫来，极隐密里遣出皇子去鸿胪馆（2）。由右大辨（3）陪去，假托做是他的儿子。相士惊奇得几次偏着头想不通。说道："相上分明该做一国之主，宜登帝王之位，照此看来，怕有作乱之忧。做个朝廷柱石，辅宰天下呢，相上又不对。"这辨官也很是贤才博士，谈得十分高兴。文诗交酬，他写出今明即将归去，幸得面见了如此稀世之人，不胜苦于别后之思，文词茂妙，皇子也酬以诗句，十分情挚，那人欢喜无限，送来重礼。朝廷也赏赐多珍。这件事原也瞒不过人，早传闻开了，东宫的外祖父大臣，猜不透究竟怎么回事。其实帝心早已鉴于倭相（4）之法，深有所虑，所以至今没把这位列入亲王，如今一边赏识这相士真不错，决意不让他徒然做个没外戚靠仗的无品亲王（5）了。自家在位也没个一定，不如以常人（6）做个朝廷后屯，倒来得前途稳妥些，因此越发督促他学习诸般才学。虽则天秉殊嘉，列诸常人不无可惜，然而做了亲王，不免受人排挤，星相能手占的，既说的一样话，决计赐姓源氏（7）了。

1. 这一史料，关系藤原氏排异窃权的背景。书中许多故事，皆有所本，隐射之中，见出作者的批评和讽刺。
2. 接待外宾的馆舍。
3. 太政官（政务中枢）的中等官。
4. 日本相术。
5. 亲王有四品，不入品的为无品亲王。这句话也描写着政界的情态。
6. 降为贵族，不算天潢。
7. 赐姓源氏是其时皇室分支的常规。

錢訳の日本語訳

そのころ、皇上は来朝した高麗人の中に、人相を見ることに優れる人がいると聞き、宇多帝の遺誡（1）があるため宮中に召すことができないので、極ひそかに皇子を鴻臚館（2）に遣わした。右大弁（3）が付き添い、彼の息子のふりをさせた。相人は驚いて何度も首を傾けて不思議がる。「相から見れば、明らかに国の主になるはずに違いない、帝位につくべきだが、そのように見れば、乱れの恐れがある。朝廷の柱石になり、天下を補佐するとしたら、またその相と

は合わない。」と言う。この弁官も賢才の博士であるので、喜んで話しを交わす。文や詩をお互い作り交して、彼は明日すぐ帰り去るが、幸いこうした類まれな人に出会うことができたが、別れてからの苦しい思いに耐えがたいと書き、言葉が多く美しい。皇子も詩を返し、まことに心を込めたものだったので、その人は嬉しい限りに思い、重々しい贈り物を送ってきた。朝廷からも多くの珍品を賜る。このことは人目に隠しきれず、世間に瞬く間に広がっていた、東宮の外祖父大臣も、いったいどういうつもりかといぶかる。実は帝の心に前々から倭相（4）の占いを参考して、深い配慮があったため、今までずっと親王に列さなかったのだった。今度この相人に観てもらい、相人が実に優れていると思ったので、改めて決して彼をむだに頼る外戚のない無品親王（5）にさせないと決めた。自家の在位も定めがないし、ただ人として朝廷の後盾になった方が進路として頼もしいである、それでますます諸芸の勉強を励ます。生まれつきの賢さで、ただ人（6）になるのがたしかに惜しいけれども、親王になり、人に排除されるに違いない、星相の達人が占った結果、同じことを言った限り、源氏（7）の姓を賜ると決めた。

1. この史料は、藤原氏が異を排除し権を窃取する背景と関わる。本の中にあるたくさんの故事、すべてもとがあり、そのなかから、作者の批評と諷刺を見出す。
2. 外国からの来訪者を接待する官舎である。
3. 太政官（政務中枢）の中等官。
4. 日本の観相。
5. 親王は四品があり、品に入らないのは無品親王である。この一文もこの政界の情態を描いている。
6. 貴族に下り、皇族ではない。
7. 賜姓源氏はその時皇室分流の決まり事である。

銭訳の特徴

本文ではなく注の部分に注目したい。銭訳の注の1「藤原氏が異を排除し権を窃取する背景と関わる。本の中にあるたくさんの故事、すべてもとがあり、そのなかから、作者の批評と諷刺を見出す。」や5「親王は四品があり、品に入らないのは無品親王である。この一文もこの政界の情態を描いている。」6「貴族

に下り、皇族ではない。」7「賜姓源氏はその時皇室分流の決まり事である。」は、銭訳独自のものであり、物語の注というよりも平安社会・文化の知識からの注である。ここからも銭氏が物語を筋だけでなく、その背景となる平安時代を理解した上で解釈しており、それを読者にも促していることがわかる。特に、光を無品親王にしてはならないという箇所「無品親王の外戚の寄せなきにては漂はさじ」に対する注の「この一文もこの政界の情態を描いている」の銭氏のコメントには、この物語の政治的背景を熟知していることをうかがわせる。

（九段）

原文

年月にそへて、御息所の御事を思し忘るるをりなし。慰むやと、さるべき人々参らせたまへど、なずらひに思しなりぬるに、先帝の四の宮の、御容貌すぐれたまへる聞こえ高くおはします、母后世になくかしづききこえたまふを、上にさぶらふ典侍は、先帝の御時の人にて、かの宮にも親しう参り馴れたりければ、いはけなくおはしましし時より見たてまつり、今もほの見たてまつりて、「亡せたまひにし御息所の御容貌に似たまへる人を、后の宮の姫宮こそいとようおぼえて生ひ出でさせたまへりけれ。ありがたき御容貌人になん」と奏しけるに、まことにやと御心とまりて、ねむごろに聞こえさせたまひけり。

母后、「あな恐ろしや、春宮の女御のいとさがなくて、桐壺更衣のあらはにはかなくもてなされにし例もゆゆしう」と思しつつみて、すがすがしう思し立たざりけるほどに、后も亡せたまひぬ。心細きさまにておはしますに、「ただ、わが女御子たちの同じ列に思ひきこえむ」といとねむごろに聞こえさせたまふ。さぶらふ人々、御後見たち、御兄弟の兵部卿の親王など、かく心細くておはしまさむよりは、内裏住みせさせたまひて、御心も慰むべくなど思しなりて、参らせたてまつりたまへり。藤壺と聞こゆ。げに御容貌ありさまあやしきまでぞおぼえたまへる。これは、人の御際まさりて、思ひなしめでたく、人もえおとしめきこえたまはねば、うけばりてあかぬことなし。かれは、人のゆるしきこえざりしに、御心ざしあやにくなりしぞかし。思しまぎりとはなれけど、おのづから御心うつろひて、こよなう思し慰むやうなるも、あはれなるわざなりけり。

源氏の君は、御あたり去りたまはぬを、ましてしげく渡らせたまふ御方はえ

恥ぢあへたまはず、いづれの御方も、我人に劣らむと思いたるやはある、とりどりにいとめでたけれど、うちおとなびたまへるに、いと若ううつくしげにて、切に隠れたまへど、おのづから漏り見たてまつる。母御息所も、影だにおぼえたまはぬを、「いとよう似たまへり」と典侍の聞こえけるを、若き御心地にいとあはれと思ひきこえたまひて、常に参らまほしく、なづさひ見たてまつらばやとおぼえたまふ。上も、限りなき御思ひどちにて、「な疎みたまひそ。あやしくよそへきこえつべき心地なんする。なめしと思さで、らうたくしたまへ。つらつき、まみなどはいとよう似たりしゆゑ、かよひて見えたまふも似げなからずなむ」など聞こえつけたまへれば、幼心地にも、はかなき花紅葉につけても心ざしを見えたてまつる。こよなう心寄せきこえたまへれば、弘徽殿女御、また、この宮とも御仲そばそばしきゆゑ、うち添へて、もとよりの憎さも立ち出でてものしと思したり。世にたぐひなしと見たてまつりたまひ、名高うおはする宮の御容貌にも、なほにほはしさはたとへむ方なく、うつくしげなるを、世の人光る君と聞こゆ。藤壺ならびたまひて、御おぼえもとりどりなれば、かかやく日の宮と聞こゆ。

銭稲孫訳

年深月久了，皇上还时刻不忘想念娘娘。也曾召见多人，冀或稍解结闷，无如连个差可比拟的，都叹不易遇到，看得世事都没意思，倒是先朝有个四公主（1），有名的美貌，经她母后出落得世无其比，这边典侍原是先朝人，合那母后熟识，看见她从小长大，现在还有时瞥见，在上前奏说：相貌要像已故那娘娘的人，身历三朝了，也从没见到过，唯有那边的公主，倒见长得真像，竟然绝世的美人。”“真的吗？”皇上记在心里，使人向那边恳求。那边母后却道：“啊哟怕人呵！那东宫女御德性不好，明明气死了桐壶更衣，是个榜样，可去不得”，忧虑不肯爽快应允，不久母后也晏驾了。落得公主，景况伶仃，皇上又使人传话过去恳求：“只当自家女儿辈看待如何”。服侍人们，后盾诸人，以及长兄的兵部卿亲王（2），都以为这般孤另，还不如入内的，心境也可宽舒一些，撺掇着进了宫。称呼藤壶（3）。果然容貌姿态，无不奇像。这个呢，出身尊贵，人品端庄，谁都没得批评的，所以皇上也觉称心，没个不足。那个究竟人不相容，上宠也是太过的些。皇上倒并不是恋新忘旧，只是未免移情，欢娱是趋，说来也自可叹。源氏是不离皇上左右的，何况频迎上幸的宫院诸人，尤其无从娇羞回避，不论哪一宫院，谁又自谓不如人呢？一个个都是美人，却摆的些大人风度，独这一位年轻美丽，虽则

一意儿躲闪，也还不免于自然流露。生母娘娘早已影儿都记不得了，但听典侍说来，是极相像的，少年心里便种下了思慕之情，时常想去亲近，博取欢心。二人都是上所特异钟爱的，还嘱咐过："莫要见外了。倒觉得怪相称呢。莫道他没规矩，抚爱他些吧。眉眼神情都相像，当做亲生也没什么不配呵！"因此孩儿的心情，也觉得无上的亲热，借些春花秋叶，攀话殷勤，弘徽殿女御合这位公主也不很相投，于是又勾起了一些宿仇旧恨，看不入眼。世人倒是把这位比容貌著称的公主还美无可喻的，称为光君。藤壶一样也是上所特宠，就称为昭阳公主（4）。

1. 那时皇位多不直传，由于外戚竞争的结果，往往冲幼即位，旋即禅代。
2. 书中一主角"紫姑"的父亲，后称式部卿。
3. 五院之一，名"飞香舍"，在后凉殿北，种有藤萝。这女御年方十六，源氏十一岁。
4. 原文"輝く日の宮"

銭訳の日本語訳

時が長く過ぎたが、皇上はまだ娘娘（桐壺更衣）のことを忘れられない。ほかの人（女君）も何人か召し少しでも気晴らしになるかもしれないと思うけれど、比べられそうな人も出会い難いと嘆き、この世のことをつまらなく思うところ、母后の手で世に類のなく成長してきた先朝の四公主（1）が名高い美貌であることを、こちらの典侍が先朝にも仕える人でその母后に馴染んでいたため、彼女が小さい頃から見、今でも時々見ることがあったので、（そのことを）上に「顔だちが亡き娘娘に似る人を、三朝の間を経っても見たことがないのですが、ただあちらの公主は（桐壺更衣）に、酷似した絶世な美人です」と奏した。「まことのことか」と、帝は心にとめて、人を遣わして懇ろに願った。あちらの母后は「あらら、恐ろしいこと。あの東宮女御は品徳が良くなくて、桐壺更衣を死に追い込んだ先例がある、行ってはいけないわ」と言い、（入内を）悩んでなかなか決めかねていたが、しばらくして母后もお亡くなりになった。公主が残され、寂しく頼りがなくて、皇上はまた人に伝言を伝えさせ「自分の娘のように世話するからどうだろう」と（入内を）願った。（彼女に）仕えているものや後見の人々、長兄の兵部卿親王（2）どもがこのように孤独で寂しいのなら入内した方が安心すると思い、（藤壺がみなから）勧められるうちに入内した。藤壺（3）と呼ばれる。いかにも顔だちも姿も（桐壺に）驚くほど似ている。この方

は、出身が尊くて、品がよくて、誰にも問題にされないので、皇上も意にかなったと思い、なんの一つの不足もない。あの方はやはり人にのぞかれ、上からの寵愛も過分であった。皇上は別に新しい人を恋い、古い人を忘れる（気が変わった）というわけではないけれども、しぜんと心を移してだんだん気楽になってゆく、これも考えてみれば嘆くべきことだ。源氏は皇上のそばに離れないので、ましてしげしげと上の寵愛を受ける宮院の方々も（光を）恥ずかしがって避けられず、どの宮院も誰に自分が及ばないと思うだろうか。ただ、皆美しくはあるが、大人として振る舞うのに対しこの方は若くて美しく、（光に見られるのを）避けようとするが、自ずから見られることもある。（光）が母娘娘（桐壺）の姿形さえ覚えていない、ただ典侍から（藤壺が）非常に似ていると聞いて、幼心に懐かしく慕う気持ちが芽生え、いつも近づき喜ばせようと思う。二人とも上から特に寵愛されている、また（帝が）「（光を）他人扱いをしないで。（二人は）ちょうどふさわしいと思う。行儀悪いと思わないで、もっと可愛がってあげてください。（あなたが桐壺に）眉毛も目も顔つきも似ているから、自分の息子だと思っても不似合いなことがないよ」と言う。そのため（光が）幼い心にも（藤壺を）非常に親しく感じ、春の花や秋の葉につけても、寧ろに声をかけたりする。弘徽殿女御はこの公主とも気が合わなくて、また昔の（桐壺更衣への）恨みを思い出し、（藤壺を）見るに堪えない。世間はこの美しさで名高い公主よりさらにたとえようもない美しい方を光君と称する。藤壺も上から特に寵愛されたので、昭陽公主（4）と称する。

1. その時皇位の多くは（帝から）直接継承せず、外戚競争の結果、ほとんど幼いうちに即位した後、すぐ譲位する。
2. 本の中の主役「紫姑」（紫の上）の父親、後は式部卿と称す。
3. 五院の一であり、「飛香舎」といい、後涼殿の北にあり、藤が植えられている。この女御の年はまだ十六才で、源氏は十一才である。
4. 原文「輝く日の宮」

銭訳の特徴

1・「これは、人の御際まさりて、思ひなしめでたく、人もえおとしめきこえたまはねば、うけばりてあかぬことなし。」の部分、銭訳では「この方は、出身が尊くて、品がよくて、誰にも問題にされないので、皇上も意にかなったと思い、

なんの一つの不足もない。」とあり、原文にない「皇上也觉称心（皇上も意にかなったと思い）」を入れている。これはこのあとに続く、「思しまぎりとはなれけど、おのづから御心うつろひて、こよなう思し慰むやうなるも、あはれなるわざなりけり。」という帝の心移りを考慮した補入であろう。

2・「母御息所も、影だにおぼえたまはぬを、「いとよう似たまへり」と典侍の聞こえけるを、若き御心地にいとあはれと思ひきこえたまひて、常に参らまほしく、なづさひ見たてまつらばやとおぼえたまふ」と光がいつも藤壺の傍に参りたい、慣れ親しみたいと思うという原文だか、銭訳はさらに踏み込んで「少年心里便种下了思慕之情，时常想去亲近，博取欢心（幼心に懐かしく慕う気持ちが芽生え、いつも近づいて、喜ばせようと思う）」と藤壺の歓心を買いたいと訳し、藤壺へより積極的な姿勢を示す。この思慕が自然に恋慕へと変わる過程を予測させる。

3・前段同様、注に銭氏の平安社会への造詣の深さが示されている。皇位継承は、帝からではなく、外戚が決め、平安時代多くの幼帝が立たされたことを指摘する。

4・藤壺の兄が紫の上の父がという注の指摘も、物語全体を把握した上での読者への導きである。

5・また同じく注で藤壺が六才で、源氏は十一才であると指摘するのも、親子にするには無理がある年齢で惹かれあうのもやむ負えないことを読者に気付かせる注であろう。

（十段）

原文

この君の御童姿、いと変へまうく思せど、十二にて御元服したまふ。居起ち思しいとなみて、限りあることに事を添へさせたまふ。一年の春宮の御元服、南殿にてありし儀式のよそほしかりし御ひびにおとさせたまはず。所どころの饗など、内蔵寮、穀倉院など、公事に仕うまつれる、おろそかなることもぞと、とりわき仰せ言ありてきよらを尽くして仕うまつれり。

おはします殿の東の廂、東向きに倚子立てて、冠者の御座引入れの大臣の御座御前にあり。申の刻にて源氏参りたまふ。角髪結ひたまへるつらつき、顔のにほひ、さま変わへたまはむこと惜しいげなり。大蔵卿くら人仕うまつる。い

ときよらなる御髪をそぐほど心苦しげなるを、上は、御息所の見ましかばと思し出づるに、たへがたきを心づよく念じかへさせたまふ。

かうぶりしたまひて、御休所にかまでたまひて、御衣奉りかへて、下りて拝したてまつりたまふさまに、皆人涙落としたまふ。帝、はた、ましてえ忍びあへたまはず、思しまぎるをりもありつる昔のこと、とりかへし悲しく思さる。いとかうきびはなるほどは、あげ劣りやと疑はしく思されつるを、あさましうつくしげさ添ひたまへり。

引入れの大臣の、皇女腹にただ一人かしづきたまふ御むすめ、春宮よりも御気色あるを、思しわづらふことありけるは、この君に奉らむの御心なりけり。内裏にも、御気色賜らせたまへりければ、「さらば、このをりの後見なかめるを、添臥にも」ともよほさせたまひければ、さ思したり。

さぶらひにまかでたまひて、人々大御酒などまゐるほど、親王たちの御座の末に源氏着きたまへり。大臣気色ばみきこえたまふことあれど、もののつつましきほどにて、ともかくもあへしらひきこえたまはず。

御前より、内侍、宣旨うけたまはり伝へて、大臣参りたまふべき召しあれば、参りたまふ。御禄の物、上の命婦取りて賜ふ。白き大袿に御衣一領、例のことなり。御盃のついでに、

いときなきはつもとゆひに長き世をちぎる心は結びこめつや

御心ばへありておどろかさせたまふ。

結びつる心も深きもとゆひに濃きむらさきの色しあせずは

と奏して、長橋より下りて舞踏したまふ。左馬寮の御馬、蔵人所の鷹すゑて賜りたまふ。御階のもとに、親王たち、上達部つらねて、禄ども品々に賜りたまふ。

その日の御前の折櫃物、籠物など、右大弁なむうけたまはりて仕うまつらせける。屯食、禄の唐櫃どもなどところせきまで、春宮の御元服のをりにも数まされり、なかなか限りもなくいかめしうなん。

銭稲孫訳

此君改却童装，虽还未免可惜，十二岁上加冠（1）。皇上早已起居之间，都在筹计，要格外的踵事增华。排场不次于那年在南殿（2）举办仪式的东宫冠礼，郑重庄严，堂皇富丽。各种飨宴之事，都经持下谕旨内藏寮、谷仓院等，不得敷衍公事，潦草供奉，因此都竭尽精美。东厢（3）朝东安设御座椅子，冠者座席、

加冠大臣（4）坐席俱在御前。中时正，源氏登殿。这卯角打扮的面庞、风采，马上要改变了，其实可惜。大藏卿任藏人（5）。总起了一头美发，直下不下剪去，皇上想到倘令妃子得见今日，非常难过。礼成，退下休息处，换了大衣，拜谒阶下，那分儿仪容，看得无人不落泪。皇上越发忍捺不住。虽则近来也有时分心余事，此刻回到了往年，悲痛难胜。方才尚未加冠，还担着心，怕易服会有损了风采，殊不料倒还添上了一表非凡的仪容奇美。加冠的大臣，膝下原有位公主所生的唯一千金，东宫有意求亲，却“踌躇未允，也就为的是属意实在于此君。这是内里亦深所嘉许的，因便下问：“何如即趁今天，正没人照料，做了陪伴（6）？”大臣就决意了。大家下来到朝房酒宴，源氏出来入席，列在亲王们的末座。大臣席上就微露其事，源氏当时矜持，什么话也没说。皇上使内侍出来传旨，宣大臣上殿，便即上去。上方命妇送过上赐礼物。照例大白褂御衣全套。饮酒中间，皇上赐句：

“童髫此日劳初总，
　　结得根心永固无？”

有心示意，大臣惶恐。奏句奉答：

“敢不根心深固结，
　　只期浓紫色无衰。”

从长廊下来，舞蹈再拜。上赐左马寮御马，藏人所苍鹰。阶下亲王们、公卿们鹓班称庆，各蒙上赐有差。是日御前各色槃篓，都由右大辨承办。摆满的糕团、唐柜（7），比东宫加冠时还要较多。真个无限的丰盛堂皇！

1. 加冠典礼，又称“元服”。
2. 紫宸殿，宫中正殿，有如现在故宫的太和殿。
3. 清凉殿内的东面朝东房间。
4. 左大臣主持典礼，左大臣是皇帝的妹夫。
5. 本是宫中官名，这里只是典礼中职务之称。
6. 天家冠礼之后，即纳“添卧”之人，今译含糊一些。
7. 有四脚的箱子，盛礼物。

銭訳の日本語訳

この君（光）の童姿を改めるにはまだ惜しいと思うけれども、十二才で加冠(1) させる。皇上は早くから起きてずっと考え、格別にこのことを盛大にした

いと思う。儀式は南殿（2）で行われた東宮の冠礼に劣らず、丁重で厳かであり、堂々として立派である。様々な食宴なども、勅旨で内蔵寮、谷倉院などを命じ、疎略なことがなく、いい加減に供奉することも許されないので、極めて精緻で美しい。東の廂（3）の東向きに御座席が設置され、冠者の座席と加冠大臣（4）の座席も御前にある。中の時になると、源氏は殿に登る。その総角の顔だちや匂いがもうすぐ変わると、まことに惜しいことだ。大蔵卿が蔵人（5）に任じられ、美しい髪の毛を手に集めたが、削ぐに堪えない、皇上はもし（更衣）妃子に今日（の光の姿）を見せることができたらと思い、非常に悲しい。礼が終わり、休憩室に退出し、大きい袍に着替え、階の下で拝する、その様子を見て涙が落ちない人がいない。皇上はますます心を静められない。近頃思いの紛れる時もあったが、その折の昔に戻るようで、悲しくてたまらない。まだ加冠されなかったとき、服が変わると美しさが劣ると心配していたが、かえって並ならぬ美貌である。加冠の大臣のもとに、公主腹の唯一の娘がいる。東宮が求婚してきたが、躊躇って承諾しなかったのもこの君のためである。このことに対して内も深く賞賛し、ついでに「今日にしたらどう、ちょうど誰も世話してくれないので、付き添って（6）もらえば？」とお尋ねになると、大臣は（光を娘婿にする）決意をした。皆降りて酒の宴となり源氏も出て出席して、親王の末に着席した。大臣は少しこのことを漏らしたが、源氏は、何も言わなかった。皇上は内侍を遣わして宣旨させ、大臣を召して、すぐに上がった。酒を飲んでいるうちに、皇上は歌を賜る：

「童の髪を今日初めて総してもらい、
　もとゆひは永遠に堅くむすんだのか？」

意思をしめし、大臣は恐れ多く思う。歌を奏して返答する。

「深くて揺るがない元結を結ばないことするか、
　ただひらすら濃い紫色が衰えないことを望む。」

長い廊下から降りて、舞いてからまた拝する。上は左馬寮の御馬、蔵人の鷹を賜る。階の下の親王、公卿たち皆祝い、それぞれ上から品々に物が賜われる。この日御前の各色の折櫃物、籠物も、すべて右大弁が用意した。屯食、唐櫃（7）も、東宮の加冠の時よりも多い。まことに限りなく堂々で立派なことだ。

1．加冠の儀式、また「元服」と言う。
2．紫宸殿、宮中の正殿、今の故宮の太和殿のようである。

3. 清涼殿の中の東向きの東の部屋である。
4. 左大臣は儀式の司会を担当する。左大臣は皇帝の妹の夫である。
5. もともと宮中の官名であるが、ここはただ儀式中の職務の名称である。
6. 皇族の冠礼の後、すぐ「添ひ臥し」を納める。今はちょっと曖昧に訳す。
7. 四脚がある箱であり、贈り物を収納する。

銭訳の特徴

1・紫式部は物語の中で、文脈によって、人物呼称を意図的に変えている。例えば、男女の話の場ならば、男君、女君、社会的立場としてならば、大殿、対の上あるいは大臣、女御などである。銭訳は、今まで桐壺更衣を「娘娘」と表記していたが、元服の日を迎える更衣の呼称を「妃子」としていた。

2・添い臥しを促す場面、原文では、式のだいぶ以前に帝から打診されていたという設定だが、銭訳は「何如即趁今天（今日にしたらどう？）」と当日、提案したように訳されている。銭氏が意図的にドラマティックに盛り上げようとした意訳であろう。物語が光を軸に急展開していくような印象を与える。豊訳はこの部分、左大臣が先に娘を添い臥しにと奏したと解釈する。「他曾将此意奏闻。（彼はこの気持を奏したことがある。）」原文の「内裏にも、御気色賜らせたまへりければ、」に当たる部分だが、銭氏は「内里亦深所嘉许的（内も深く賞賛し）」と帝が左大臣が娘を東宮に入内させなかった判断を褒めたと解釈しているのに対し、豊訳では左大臣だけが娘を光に娶らせようと思っていることになる。光と葵の婚姻は光に強力な後見をつけたいと願った帝が誰よりも願ったものであることが豊訳では伝わらない。豊訳の帝の台詞「他既有此心，我就玉成其事，教她侍寝。（彼がこの気持を抱える以上、私はこの事を叶ってあげて、彼女に寝添いをさせようか。）」では、帝は左大臣のために結婚を許したことになる。林訳も「左大臣曾经向皇上进言，皇上表示（左大臣が皇上に申したことがあり、皇上が仰ることには、）」と左大臣側の希望の婚姻と読める。勿論、左大臣が婚姻を望んだのは確かだが、それもまず帝が光の将来の安定のためにそれを望んでおり、その意向を左大臣が汲み取ったというものである。銭訳は二人の思惑をはっきり理解した上で訳していることがわかる。

3・帝自らが左大臣に贈り、返歌を受け取る場面「（帝）「いときなきはつもとゆひに長き世をちぎる心は結びこめつや」御心ばへありておどろかさせたまふ。（左大臣）「結びつる心も深きもとゆひに濃きむらさきの色しあせずは」」。帝が

契りは大丈夫なのか、心をこめたのであろうなと確認され、驚く大臣が、私は心を込めました、光の思い（帝の思いでもある）が色あせない限りと返歌する。銭訳では「「童の髪を今日初めて総してもらい、根と心を永遠に結べるのか？」意思をしめし、大臣は恐れ多く思う。歌を奏して返答する。「もちろん深くて揺るがない根と心を結んだが、ただひらすら濃い紫色は衰えないと望んでいる。」となっている。元結「もとゆい」を「根と心」で訳した理由は何か。成人男子は冠をかぶるために髷を結ぶ。それを根に見立て、それを結ぶ組紐の元結を左大臣家と光が結ばれることへの期待を伝えているという読解である。元結の紐ではなく、結ぶ髷に注目し、それを根に見立て、髷を結ぶということは（光の）心と（左大臣の）心が結ばれると訳している。対して豊訳は「（皇上）童发今承亲手束，合欢双带绾成无？（左大臣）朱丝已绾同心结，但愿深红永不消。((帝）今はあなたに頼んで童髪を結い上げてもらい、合歓の二つ帯は紐にむさばれるのか。(左大臣）朱糸はすでに結い上げ同心結となる（同じ心が結ばれる)、この深い紅が永遠に消えないようと願う。)」と中国の結婚の象徴である赤い糸に変え、新婚の祝い歌のように解釈している。林訳は「（皇上）新束发兮初加冠，金童玉女诚嘉偶，紫带可曾兮系合欢？（左大臣）新束发兮紫带鲜，曾将丝组殷勤系，但愿君情兮似此坚。((帝）新しく結ばれた髪、初冠、金童玉女（少年少女二人）はまことにいいカップル（のようにみえる）紫の帯は合歓に結ばれたのか？（左大臣）新しく結ばれた髪と紫の帯、髪を懇ろに結んだ、君の情けはこれと同じように堅いと願う。)」「君」を帝ととらえるなら左大臣から帝への確認と読めるが、銭訳のようなはっきりとした政略結婚として解釈されてはいない。

（十一段）

原文

その夜、大臣の御里に源氏の君まかでさせたまふ。作法世にめづらしきまでもてかしづききこえたまへり。いときびはにておはしたるを、ゆゆしううつくしと思ひきこえたまへり。女君は、すこし過ぐしたまへるほどに、いと若うおはすれば、似げなく恥かしと思いたり。

この大臣の御おぼえいとやむごとなきに、母宮、内裏のひとつ后腹になむおはしければ、いづ方につけてもいとはなやかなるに、この君さへかくおはし添

ひぬれば、春宮の御祖父にて、つひに世の仲を知りたまふべき右大臣の御勢ひは、ものにもあらずおされたまへり。御子どもあまた腹々にものしたまふ。宮の御腹は、蔵人少将にていと若うをかしきを、右大臣の、御仲はいとよからねど、え見過ぐしたまはで、かしづきたまふ四の君にあはせたまへり、劣らずもてかしづきたるを、あらまほしき御あはひどもになん。

源氏の君は、上の常に召しまつうはせば、心やすく里住みもえしたまはず。心の中には、ただ、藤壺の御ありさまをたぐひなしと思ひきこえて、さやうならむ人をこそ見め、似る人なくもおはしけるかな、大殿の君、いとをかしげにかしづかれたる人とは見ゆれど、心にもつかずおぼえたまひて、幼きほどの心ひとつにかかりて、いと苦しきまでぞおはしける。

大人になりたまひて後は、ありしやうに、御簾の内にも入れたまはず、御遊びのをりをり、琴笛の音に聞こえ通ひ、ほのかなる御声を慰めにて、内裏住みのみ好ましうおぼえたまふ。五六日さぶらひたまひて、大殿に二三日など、絶え絶えにまかでたまへど、ただ今は、幼き御ほどに、罪なく思しなして、いとなみかしづききこえたまふ。御方々の人々、世の中におしなべたらぬを選りととのへすぐりてさぶらはせたまふ。御心につくべき御遊びをし、おほなほな思しいたつく。

内裏には、下の淑景舎を御曹司にて、母御息所の御方の人々まかで散らずさぶらはせたまふ。里の殿は、修理職、内匠寮に宣旨下りて、二なう改め造らせたまふ。もとの木立、山のたたずまひおもしろき所なりけるを、池の心広くしなして、めでたく造りののしいる。かかる所に、思ふやうならむ人を据ゑて住まばやとのみ、嘆かしう思しわたる。

光る君といふ名は、高麗人のめできこえてつけたてまつりけるとぞ言ひ伝へたるとなむ。

銭稲孫訳

当天晚上，源氏出就大臣邸第。礼节隆重，人间少见。大臣看他稚年聪颖，十分欢喜。女公子（1）虽则稍居年长，妙龄娇嫩，羞涩莫能名状。大臣在朝，皇眷很厚，母堂公主，又是和皇上一母同胞，门第万分华贵，今番再添上这一位，那东宫外祖，转眼就要执政天下的右大臣权势，都被压过，也算不得什么了。各房所生的公子多人。公主所出，还有位藏人少将，年青才美，右大臣和这边不大相投，都不肯等闲放过，把个珍爱的四千金匹配与他。器重少将，一如这

边的器重源氏，这两家之间，真勘羡慕。源氏是常奉上召的，在家不得宽怀长住。心里又切慕着藤壶的姿容无比，素常忖思娶室必须如此人才，然而但求个差近似的都真没有呵！府里这位呢，明知是修养有素，人品高雅的，可是总觉意不相投，年少心偏，甚至苦思烦恼。自从做了大人，不像以前，不容近入帘内了。却只喜欢住在大内里。每逢皇上游兴之时，从琴音笛音里，隐约听到一句两句歌声语声，引以为慰。一住五六天，偶来府里，不过两三天，这边恕其年幼，也不见怪，只是竭意奉承他。服侍人们，都妙选不同一般的来伺候他。竭尽法儿只拣他心爱的玩意，逗他欢心。大内里呢，就把原来的淑景舍做他的朝房，服侍他生母娘娘的侍女们，一个不叫散出，仍旧伺候他。府里呢，特敕修理职、内匠寮改造一新。将原来树木、假山景致地方，开宽池心，精巧营缮。源氏倒只是叹息，这般精构，却没个得意的人儿相与同栖。光君这个绰号，相传还是高丽人爱他，送他的称呼云。

1．源氏正妻“葵君”，是年十六岁，与藤壶女御同年。

銭訳の日本語訳

その夜、源氏は（内裏を）出て大臣の邸に着く。儀式は盛大で厳かで、世に珍しい。大臣は幼くて賢い源氏を見てとても嬉しい。女公子（女君）(1) はすこし年上だが、若くてきゃしゃで、恥じらって上手く表現できない。大臣は朝廷に勤め、皇上からの恩も厚く、母堂の公主（宮）も皇上と同腹の兄弟で、家柄は非常に高い、今回この方も加え、あのもうすぐ天下を政る右大臣の権勢も圧倒され大したものとは言えない。各妻が生んだ公子がたくさんいる。公主（宮）腹なのは、もう一人、蔵人の少将がいる。若くて才能もあり、右大臣はこちらとあまり合わないが（この少将を）逃さない。大事にしている四番目の娘を彼にあげる。少将を大事にする様子は、こちらが源氏を大臣にするようである。この両家は、まことに羨ましがれるものだ。源氏はいつも上に召され、家で気長にゆっくり棲みつくことができない。また心の中に類がない藤壺の容貌と姿を熱く慕い、普段から「嫁取りするならこのような人材でなければならないと思うが、すこしだけ似ている者もないなあ。この邸の方は、教養が高く、品も雅だとわかっているが、何らかの意が合わない気がする」と若く心も偏ってしまっているので、苦しみ悩む。大人になってからは、昔と違い（藤壺の）御簾の中に入ることが許されない。だが内裏に住むことが好きである。皇上が遊び

をする時につけても琴の音や笛の音から、一言二言の（藤壺の）歌や言葉を聞くと、慰めになる。(内裏に）住むと五六日になるので、たまに邸に来ても、二三日しかいない。(左大臣は）は（光の）幼さを許し咎めず、ひたすら心を尽くして彼に奉仕する。仕えるものもすべて並ではないものを選んで仕えさせる。すべての手段を用い、彼が好きなものを選び彼を喜ばせようとしている。内裏では、もともとの淑景舎を彼の控え室にさせ、実母に仕えた侍女たちは一人も去らず、また彼に仕える。邸の中を修理職、内匠寮に改めさせる。もともとの木、山などを、池の中心を広げ、申し分なく造営している。源氏はこうした精巧な構造に、共に暮らす意に叶う人がいないと嘆くばかりである。光君というあだなも、高麗人が彼を愛するため、送った称呼だと言われている。

1．源氏の正妻「葵君」(葵上)、この年十六才、藤壺女御と同じ年。

銭訳の特徴

1・「女君は、すこし過ぐしたまへるほどに、いと若うおはすれば、似げなく恥かしと思いたり。」の部分、銭訳は「女公子虽则稍居年长，妙龄娇嫩，羞涩莫能名状。(女公子（女君）はすこし年上だが、若くてきゃしゃで、恥じらって上手く表現できない。」とあり、「いと若うおはすれば」の主語を光ではなくて葵の上としている。主語が文中で、何度も変わるのが源氏物語の特徴だが、銭氏は年は上だが、若い雰囲気と解釈している。ここに付けられた注「源氏正妻“葵君”，是年十六岁，与藤壶女御同年。(源氏の正妻「葵君」(葵上)、この年十六才、藤壺女御と同じ年。)」も実は藤壺より一歳若いが、肝要な点は藤壺と葵が年齢がほとんど変わらないということは、光と藤壺が結婚してもおかしくない年周りであり、その後の二人の密通を想定した上での注である。原文どおりに訳すると葵が年上で光が若いので葵が決まり悪く思っているという内容である。銭訳だと年に関わらず葵が幼い様子に受けとれる訳である。葵が、歌も残さず、感情表現も乏しいので銭訳が完成されていたどのように描いたかと思うと残念である。

2・「心の中には、ただ、藤壺の御ありさまをたぐひなしと思ひきこえて、さやうならむ人をこそ見め、似る人なくもおはしけるかな」の部分、銭訳では「また心の中に類がない藤壺の容貌と姿を熱く慕うので、普段から嫁取りするならこのような人材でなければならないと思うが、すこしだけ似ている者もないな

あ。」と訳する。他訳をみると豊訳が「他心中一味认为藤壶女御的美貌盖世无双。他想：“我能和这样的一个人结婚才好。这真是世间少有的美人啊！”（彼の心に一筋藤壺女御の美貌が世に類がないと思う。「私がこのような人と結婚することができたら本当にいい。これはまことに世に少ない美人だわ！」と彼は思う。）」林訳が「不知从什么时候起，他不自觉地认为只有藤壶才是绝世佳人。又偷偷地想，如果要娶妻，希望能娶得像她这样的人才好。藤壶的美真是没有人及得上啊！（いつの間にか、彼は藤壺だけが絶世の佳人だと思うようになってきた。またこっそりこう思うことには、「もし嫁取りするならば、彼女のような人を迎えればいい」と。藤壺の美しさに及ぶ人は本当にいないなあ。）」ともに、光が惹かれる理由を専ら藤壺の美貌にしている。銭訳の「人材」という訳語に光が惹かれる理由は、藤壺の人となりにあると銭氏が解釈していることがわかる。

それは原文が藤壺への思いに続いて、葵の人となりを光が「大殿の君、いとをかしげにかしづかれたる人とは見ゆれど、心にもつかずおぼえたまひて」と評し、だからこそ藤壺を「心にもつかず」幼きほどの心ひとつにかかりて、いと苦しきまでぞおはしける。

３・光が亡き母の淑景舎を手直しし、「かかる所に、思ふやうならむ人を据ゑて住まばやとのみ、嘆かしう思しわたる。」と思う場面、銭訳は「源氏はただこうした精巧な構造に、共に暮らす意に叶う人がいないと嘆くばかりだ」と訳しているのに対し豊訳では「源氏公子想道：“这个地方，让我和我所恋慕的人同住才好。”心中不免郁悒。（源氏はこのところで、私と私が慕っている人とともに住めばいいと思う。心に鬱屈と感じる）」。林訳では「不过，即使在这种时候，源氏也难免还会遗憾的想到；如果能够和那位心上人儿同住在这种地方该有多好啊！（しかし、こんな時までも、源氏はまだ残念だと感じて、もしその好きな人とともにここに暮らせばどんなにいいよなあと思う。）」大きな差異は感じられないが、銭訳が淑景舎を自分の思うままに手を入れたからこそそこに思いに叶う人を住まわせたいという意まで理解して「这般精构」と訳した銭訳の原文理解の深さはには到底及ばない。

まとめ

前稿では、銭訳が豊訳、林訳に比べ、どれほど深く原文を理解していたかを中心にまとめた。本稿は、さらに銭氏が読者に平安社会を理解させようと腐心

している箇所を注から読み解いた。また、銭訳が日本語の訳文からではなく、自ら原文に挑み、自分自身の読解をしていることがはっきりわかる箇所も散見した。この訳文は銭氏の源氏物語の読解の深さをしめすものである。

昨今、銭訳や豊訳の発行経緯に関する論文が発表された。その中でも、呉衛峰氏の「豊子愷訳『源氏物語』の出版の遅れについて」(『東北公益文科大学総合研究論集（21)』）は今がなき四巻も含めた銭訳と豊訳の両方を比べ読んだ周作人や担当編集者文潔若氏が銭訳に比べ、豊訳が劣ると判断したことを当時の証言や記録から明らかにされたことは注目に値する。しかし何が劣るのかについては言及されていない。また楊暁文氏「中国における『源氏物語』全訳の成立に関する一考察　：豊子愷、銭稲孫、周作人のかかわりを中心に」(『中国研究月報 66(2)』）は、銭氏が完訳を許された豊氏に在る種嫉妬を抱いたが、とにかく銭氏の源氏物語の情熱は豊氏に訳してもらうことで間接的に達成できたというような解釈をされている。当時の出版社と訳者の関係を知る上では貴重な論考だが、残念ながら銭氏は豊氏によって己れの源氏物語への思いを間接的に発表できたとは到底思えないだろう。それ程銭訳と現在最も世に通行している豊訳とでは源氏物語理解の深さに違いがあるのである[注2]。

追記　本稿は札幌大学研究助成の成果の一つである。

注1　拙稿「銭稲孫訳『源氏物語』の特徴について（上)」(『比較文化論叢28』2013年3月号、札幌大学文化学部）参照。なお銭訳は『訳文』(《譯文》）の第50期によるものである。(『訳文』第50期（亜洲文学専号）一九五七年八月号、人民文学出版社、P70-80　中国語の字体は全て簡体字に統一した。)

注2　豊訳『源氏物語』の問題については、拙稿「豊子愷訳『源氏物語』の問題点について―「桐壷巻」における林文月訳、銭稲孫訳との比較―」(『東アジア比較文化研究』11号、2012年6月30日、東アジア比較文化国際会議日本支部）